

# LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [卒業生インタビュー]

## 誰かの「光」になって 写真への恩返しをしたい

見る人に眼前の感動を届けたい

●写真家  
高田 晋浩 さん — 経済学部2012年卒業 —



### ●スペインのサッカー選手が希望の光に

穏やかな語り口と明朗な言葉。今や写真家として活躍する高田晋浩さんのはつらつとした姿からは、生きる意味を見出せなくなった時期があったとは、にわかに信じがたい。

最初の大きな挫折は、関西大学第一高校の入学直後にやってきた。「部活動を選ぶための体験入部で骨折してしまっただけです。今でこそ笑い話にしているが、けがで高校生活に出遅れた多感な少年の心は揺れた。「皆は高校生活を楽しんでいるのに、自分は何しているんだろう」。何ともできない焦りから、絶望さえ感じた。

そんな生活の中で一つの希望の光を見つけた。「療養中はずっとテレビで大好きなサッカーを見ていたんです」。目を奪われたのは特に海外の試合の模様。フェルナンド・トーレスというスペインの選手を追いかけた。「決して強くはないチームで、誰よりも気を吐いている。あきらめないし、必ずチームのために一矢報いる」。ひたむきなサッカー選手への共感と、そんな彼を愛するスペインという国への興味が、高田さんを支えた。

### ●自分を変えるための留学

高校生活を終え、高田さんは関西大学の門をくぐる。「サッカーサークルに入ったりして、充実はしていました」。それでも、自身の生き方への不安や疑問はぬぐえなかった。

希望はまたしてもスペインにあった。「第二外国語で選択したスペイン語の授業が楽しくて」。授業の他にスペイン語教室にも通うほど熱心になった。そして、スペイン留学を決意する。「スペインに行けば、生きるためのヒントが見つかるのではないか」。根拠はなかったが、何かが変わる予感があった。大学近くでの一人暮らしさえ許してくれなかった厳格な両親に相談すると、意外にも快諾してくれた。「息子の本気を感じ取ったのかもしれない」。

留学を実現させたのは、大学3年次生の秋。アルバイトで貯めた資金を握りしめ、1年間のスペイン留学をスタートさせた。語学力を上げるため、最初はあえて日本人の少ないアリカンテという地中海に面した街を選んだ。しかし、「日本で学んではきたも

の、現地で全く言葉が通じない」。現地の人から差別的な扱いを受けることもあり「人格を否定されているようで、つらかったし、悔しかった」。孤独でくじけそうにもなったが、高田さんは自問した。「何のためにスペインにやってきたのか、自分を変えて、生き方を見つけるためだったんじゃないのか」。

すると、スーパーマーケットやバルに行ったら、積極的に現地の人に話しかけた。ものの1カ月。スペイン語の上達とともに、メンタル面の向上を実感した。「僕にとって、生まれて初めてとも言える成功体験でした」。

### ●写真家の原点となったある一枚の写真

運命の出合いは、そんな修行のさなかに訪れた。いつものように入ったアリカンテのバルに、一枚の写真を見つける。うっそうとした森に滝の流れる風景が、雑然としたタイルに貼り付けられていた。「改めて見ると何てことはない写真なんです、目が釘付けになりました」。こんな写真を撮ってみたい。生き方を見つけた瞬間だった。

帰国し、卒業後は大手都市銀行へ。「入行時からいつかは写真家になるつもりでした。」2年間の銀行勤めで貯めた資金を手に日本全国の自然や建物を撮影しながら、誰にも師事せず、独学で写真を学んだ。やがて東京に拠点を移し、安価でハードな撮影の仕事と引っ越しなどのアルバイトで生計を立てる日々。「ギャラリーやカメラ店に飛び込んで、作品を渡していました」。

28歳頃に写真教室を始めた。「自分のちょっとしたアドバイスで受講生の方の写真が格段に良くなるのを見て、自分が人の役に立つんだと実感できました」。教室は現在も続いていて、のべ2,600人以上が高田さんに師事している。同じ頃、自作がコンテストで受賞した。着実に写真家としての実績を積み上げている。

### ●自分の写真を誰かの希望に

高田さんが写し出すのは、大地、空、海、川、木々、草花などの自然だ。被写体を選ぶ基準は「感動」と語る。「自身の感動したものを撮りたい」。スペインをはじめさまざまな国を訪れ、時に



(SIGNS OF SUMMER)

眼前の一瞬に涙しながらシャッターを切る。

そんな自分の感動体験を誰かに届けることができると語る。根底にあるのは、今も財布に入れているバルの一枚とトーレス選手を直接見たという体験だ。「スペイン留学中に、ワールドカップの優勝パレードで彼を見たんです」。憧れの人と目が合った瞬間、考えた。「トーレスは僕を知らない。でも僕は彼を知っていて、希望や感動をもらっている」。高田さんは希望、感動を「光」と表現する。「自分の写真が誰かの光になることを願っています。それが僕を導いてくれた写真への恩返しであり、僕の生きる意味だと考えています」。

写真家として10年の節目を迎えようとしている今、高田さんは一つの決断をした。「新たな挑戦のために、ずっと続けているスペインでの撮影に区切りをつける」。今、高田さんは自分を支え、導いてくれたスペインの風景を一冊の写真集にまとめるべく奔走している。「いつか自分の子どもに自慢できるような写真集にしたいですね」と、はにかむ表情は、生き方に迷いのない穏やかな人間のそれだった。



(PERFORMANCE OF LIGHT)



(DRAGONS NEST)

自分には何も誇れるものがないんじゃないか。高校入学直後のけがで入院していたある日、高田晋浩さんはぼうぜんとしていた。高校生にして「誇れるものがなく、生きている意味が見出せなくなったんです」。大学入学後も、そんな鬱々とした気分はまとわりついていた。しかし、留学先のスペインである一枚の風景写真と運命的な出会いを果たす。それは一人の人間の今後を決定づける出来事だった。



学生時代の高田さん。(左) 関西大学サッカーサークルの仲間たちと (中) スペイン留学時代 (右) 留学中にスペインがサッカーW杯で優勝を果たし、地元の人たちと共に祝った

高田 晋浩 — たかだ すずひろ  
■1988年大阪府生まれ。関西大学第一中学校・第一高等学校卒業。2012年関西大学経済学部卒業。3年次生のときに留学したスペインで、一枚の風景写真と出会い写真家になることを決意。大学卒業後、大手都市銀行に入行。現在、写真家として独立し、国内外で積極的に撮影に取り組みながら写真教室を開講する。2020年から3年連続で国際写真賞(International Photography Awards)を受賞。



代表作の一つ「RECITAL」と高田さん